



水墨画について

水墨画は、墨と水のみを用いて森羅万象を描き出す東アジア独自の芸術です。「モノクロームで、なんだか小難しそう」と、敷居が高く感じる方も多いでしょう。その鑑賞のカギは、筆を動かしたときの感覚を知っていることにあります。

書道の授業で、筆を手を持った感覚を思い起こしてみましょう。ふさふさとした筆の穂を墨に浸すとじんわりと墨を含み、和紙の上に置くと、柔らかく沈み込み、あっという間に墨が和紙に染みこんでいきます。筆を動かすと黒い線がくっきりとつき、その周囲にも染みこんで広がります。穂先だけを和紙につけて速く動かせば細い線になり、筆を倒してゆっくり動かせば太い線になります。描き始めは筆に含まれている墨が多いのでにじみやすく、描き続けるとだんだんかすれていきます。そして、筆を紙に軽く押しつけたり、勢いよく跳ね上げたり、徐々に浮かせて線を細くしたりと、筆の動かし方によってさまざまな線を引くことができます。

もし筆と墨を使うことに慣れていけば、こうした線を見ているだけで、絵師がどこからどこへ向かって、どのくらいの強さ、速さで筆を動かしたのかを、感覚的に理解できます。絵は目で見るものですが、同時に体でも追体験できるのです。ミネアポリス美術館所蔵の《海老図》をじっくり鑑賞してみましょう。目はくっきりと濃く、体の一部は淡く細かく、そして脚や触覚の先は勢いのあるかすれた線で描かれており、こうした多様な筆線によって、海老の表情や動き、存在感まで効果的に表現されていることがわかります。目で線をたどると、筆をやさしく紙に押し付けたり、勢いよくはったりといった絵師の手の動きがあたりと感じられることでしょう。

このように水墨画には、描かれているテーマと墨の線を同時に味わうという特性があります。そして水墨画鑑賞の、もう一つのカギに、「気」があります。

皆さんはこの絵のなかにどんな雰囲気を感じますか。すがすがしい感じでしょうか。力強い感じでしょうか。このように、形のあるものではなく、言葉にはならない、私たちそれぞれが絵のなかに感じとるもの、それが「気」です。優れた絵画の一要素とされる、「気韻生動」（いきいきとしていること）という、中国伝来の言葉に聞き覚えのある方もいるかもしれません。

「気」の概念は古代中国で生まれ、世界の全ては気を原理として成り立っていると考えられてきました。気を基にして、あらゆるものが生まれ、つながりあっており、世界全体がひとつの気でもあります。山や木、人や動植物も、気から成り立っていて、変化し続けています。そして、絵には、

それを描いた画家自身の気が反映されます。清らかな気を持つ人、つまり内面が清らかな人が絵を描けば、その絵も清らかな印象を与えるものになるのです。この絵が発する「気」を感じながら、画家の面影を想像するのも楽しいですね。

鮫島圭代著 「水墨画について」 「江戸絵画の世界」 ジャパン・パスト&プレゼント 2026年



伊藤若冲 《海老図》 ミネアポリス美術館